
艦魂異聞録 ～エイハブよ、大和を討て！～

流水郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

艦魂異聞録 ～エイハブよ、大和を討て！～

【Nコード】

N6497Q

【作者名】

流水郎

【あらすじ】

アメリカ海軍空母機動部隊の一隻として大戦を生き残り、海上博物館として身を休める空母『イントレピッド』。その艦魂は来訪者に、ある男の生き様を話す。それは大戦中、国のためでなくただ自分のため戦艦『大和』に挑んだ、雷撃機乗りの物語だった……。守りたいものを持たない男と、守るべきもの無しでは生きられない艦魂たち。人の命も心も、全てを壊し蹂躪していく、戦争という名の死神に憑かれた者たち。彼らの生き様を伝える語り部が、口を開く。

プロローグ

ん？ 私の姿が見えるの？

へえ、日本から来たんだ。ようこそマンハッタンへ、そしてイン
トレピッド海上航空宇宙博物館へ。

そう、私はこの空母、エセックス級三番艦『イントレピッド』の
艦魂……まあ空母と言っても今じゃ博物館だけだね。

もう展示は一回りしてきたの？ 甲板のコンコルドの中、見た？
A-6 攻撃機のコクピットには乗った？ あ、カミカゼの人たち
の手紙は読んだ？ 撃墜した日本軍機の数とか、日本人からすれば
胸糞悪くなっただんじゃない？

あつ、ごめん。外の人と話したの久しぶりでさ、それも日本人だ
から、ちよつと盛り上がっちゃって。

まだ時間、ある？

じゃあ私の昔話に付き合ってよ。安心して、日本人への恨みごと
なんかじゃない。

私は今まで、沢山の人死んで行くのを見てきた。乗組員の人たち、同じ艦魂たち、私に体当たりしてきたカミカゼの人たち……。でも私は生き残って、今は博物館として生きてる。なら死んだ人たちのことを、そう、生き様を伝えてあげたいんだ。それがあの人たちのために、私ができることだから。

……ありがとう。コーヒーくらい奢るよ。

あれは沖繩上陸作戦の少し前のこと。アメリカ海軍は日本海軍の巨大戦艦が沖繩へ向かうという情報入手したんだ。そう、かの『ヤマト』だよ。

スプルーアンス大將は戦艦同士の決戦を望んだけど、『ヤマト』たちの進路が不明確だったこともあって、マーク・ミッチャー中將率いる第58機動部隊に攻撃を命じた。私たちエセツクス級を中心とした、空母機動部隊にね。

これから話すのは雷撃機乗りとして『ヤマト』に挑んだ、ある復讐者の物語……。
エンジャー

あ、私のことはイシュメルって呼んで。

プロローグ（後書き）

どうも、艦魂作者で一番のひねくれ者・流水郎です。
以前から温めていた構想、ようやく投稿いたします。
今回は連載ですが、一話一話がかなり短く、三〇四話＋エピローグ
の予定です。

海に紫煙を燻らせて（前書き）

ここからが本編となります。
一話一話は短いです。

海に紫煙を燻らせて

…… 1945年 4月6日 ……

巨大な空母も、大海原に浮かべてしまえばけし粒同然。それ故に着艦という行為は、立った状態で針を落とし、足元にあるもう一本の針に命中させるようなものとさえ言われる高等技術だ。しかし艦載機乗りとなった者たちは、日常的にこれを行わなければならない。

「おつ、来た来た」

イントレピッドは自分に接近する、TBF『アヴェンジャー』雷撃機に小さな手を振った。

機体は着艦用フックを出して空母の上空を旋回し、脚を出してもう一度旋回する。そして艦尾からアプローチ。LSO（着陸信号士官）が両手に持ったパドルで着艦の指示を出す。

エセックス級空母の全長は270mだが、それでも飛行機が着地・滑走・停止するには足りない。飛行甲板にワイヤーを張り、パイロットは機体下部のフックをそれに引っかけて強引に停止させるのだ。ワイヤーは四本張られ、艦載機から見て手前から三本目のワイヤーにかけるのが理想とされる。

イントレピッドが空母の艦魂に生まれて良かったと思うことは、このスリリングな光景をいつも間近で見られることだ。艦魂は船の精霊であり、船と共に生き、船と命運を共にする。それらは総じて美しい女性の姿をしているが、彼女たちが見えるのは一握りの人間のみとされている。自らが飛ぶことを許されない彼女は、こうして飛行機を見ることが何よりも楽しみだった。

TBFが着艦コースに入る。失敗時に再上昇できるように、ある程度の速度は維持していなければならない。単発機としては大柄のずんぐりとした機体が、機首を上げて甲板の上をかすめ……

フックが三本目のワイヤーにかかった。

「よし！」

イントレピッドは小さくガッツポーズをする。

着艦したTBFは、機首に鈎で貫かれた鯨の絵が描かれていた。この手のノーズアートというのはパイロットたちが自己主張のために行っているもので、軍は士気高揚のため黙認していることが多かった。中世の騎士達が武具に紋章や家名を刻んだ名残と言えなくもないだろう。

やがて、パイロットと爆撃手、後部機銃手が機体から降りてくる。

「お疲れ様」

イントレピッドが声をかけると、パイロットだけが軽く笑顔を向けた。金髪に鳶色の瞳の、若い男だ。艦魂たる彼女の姿を見ることができる、数少ない人間。他の乗組員たちの前で話しているのは彼が変な目で見られるため、お喋りは後だ。

彼女はTBFのノーズアートを見つめた。巨大な鈎で串刺しにされた、白い鯨の絵。その下に書かれた、『PEQUOD』の文字。ある小説を元にしたデザインだ。

この日、まだ彼女たちは知らなかった。

これから自分たちが、とてつもない巨鯨に挑むことを。

「……………何度やつても、着艦ってのはおつかねえ」

海を眺めながら、TBFのパイロット……………グラハム・チェンバレン少尉は苦笑した。精悍な、それでいてどこか柔らかさのある顔つきで、口に咥えた煙草に火を点ける。銘柄はラッキーストライク。アメリカで古くから売られている煙草だ。

「グラハムくらいになると、着艦フックの先に目がついてるようなもんでしょ？」

イントレピッドは傍に歩み寄り、さっと手を伸ばして煙草を奪お

うとした。即座にグラハムがその手を払いのけ、イントレピッドは舌打ちする。

「戦闘機乗りの連中はまだ気が楽だろうさ。俺は爆撃手と機銃手の命も預からなきゃならない」

「本物のエイハブ船長も、そのくらい部下思いだったら良かったのに」

イントレピッドはグラハムに、一冊の本を差し出した。拍子に書かれた題名は『Moby-Dick』。日本では『白鯨』という名で知られる小説で、巨大な白い鯨に片足を食いちぎられた捕鯨船船長・エイハブが、復讐の執念で白鯨を追う物語である。1851年に元捕鯨船乗りのハーマン・メヴィルによって書かれたが、暗く難解なそのストーリーが評価されたのは彼の死後だった。

「読み終わったから、返すよ」

「ああ」

グラハムが本を受け取った瞬間、イントレピッドは再び煙草を狙う。しかしグラハムがひよいと顔を背けたため、彼女の手は空を切った。

「で、読んだ感想はどうだった？」

「……海が怖くなった、かな」

人によつては、艦魂にあるまじき発言と思うかもしれない。だがイントレピッドは恐怖心に正直だった。

多種多様な人種の乗組員たちを率いて、白鯨に挑むエイハブ船長。本能のまま大自然に生きる白鯨。海と切り離されない存在である彼女だからこそ、認めなければならぬ恐怖を感じたのだ。

グラハムも、彼女の答えに頷いた。

「空から空母を見下ろしてみりゃ、よく分かる。人間がどんなに粹がつても、海の上じゃ針の先程度のプライド……おっと」

横から伸びてきた手を、グラハムは咄嗟に掴み取る。イントレピッドは悔しそうに唸った。

「ちょっとくらい吸わせてくれてもいいじゃん！」

「ガキが煙草吸っていいわけあるか」

「ガキって言わないでよ！ 私は見た目がちっちゃいだけ！」

イントレピッドは彼女の『姉妹』の中でも小柄で、艦魂仲間からよくからかわれている。頭は良く、妹たちの面倒見も良いのだが、グラハムの前では子供のような面が表に出るのは否めない。もつともグラハムは、ほとんどの艦魂を子供扱いするような男だったが。

「ま、本は貸しても煙草はやれねえ」

「もう。うちのエイハブ船長はケチなんだから」

イントレピッドのふくれっつらに、グラハムはそういう所が子どもなんだと返す。

先ほど彼女が『本物のエイハブ船長』と言ったのは、グラハムが仲間内でエイハブと呼ばれているせいだ。以前の海戦で敵艦に雷撃を行った際、グラハムは零戦の攻撃を受けて負傷した。血まみれの状態で母艦に戻った彼は、助けに駆け寄ってきた整備兵に大声で叫んだのである。

新しい魚雷を積み、と。

敵艦に魚雷を叩き込むことに、彼は凄まじい執念を持っていた。血眼になって白鯨を追う、エイハブ船長のような。グラハム自身も

『Moby-Dick』の愛読者だったため、やがて愛機の機首に鋳で貫かれた白鯨の絵、そしてエイハブ船長の乗る捕鯨船『ピークオド』の名を書き込んだのである。

彼が艦魂が見えるようになったのも、満身創痍で帰還してからだった。

「そもそも、艦魂と会ったときの第一声が『よう、チビ』だったのはグラハムくらいだと思うよ？ もう第一印象最悪！」

「だからそれは悪かったって。お前たまたま軍服姿じゃなかったし、寄港中だったし、現地のクソガキがこっそり乗り込んだのかと…」

…」

会話中、懲りずに煙草を奪おうとするイントレピッドの手をかわし、グラハムは思い切り紫煙を吐きつけた。途端にイントレピッドはむせ込み、咳をする。

「ところでお前の姉ちゃんたち、相変わらずか？」

「げほっ、げほ……うん、相変わらず」

イントレピッドはため息を吐いた。

エセックス級三番艦の『イントレピッド』からすれば、姉というのは一番艦の『エセックス』に、二番艦『ヨークタウン』の艦魂ということになる。

艦魂にも上下関係があり、空母や戦艦が最も格上、その次に巡洋艦、駆逐艦と続き、末端は潜水艦や魚雷艇など、という具合に組織が形成されている。そして時には戦況について話し合ったり、勉強会のような物を開くこともあるのだが、人間同様最も権威のある艦魂がその場を仕切るのだ。今の彼女たち第58機動部隊にとってはエセックスと、歴戦の英雄艦と名高い空母『エンタープライズ』の

艦魂がその役割を担っている……はずだった。

「ちょっと様子見に行こうかな…… グラムも来てよ」

「俺、お前の姉妹から嫌われてるが」

グラムはぽりぽりと頬を掻いた。艦魂を子供扱いし、彼女らの作戦会議も「実戦には何の影響も無い、ままごとと同じ」と貶すような男だから、嫌われるのも無理はない。

「いいからいいから。グラハムの嫌味を聞けば、姉さんもやる気出すかもしれないし」

「やれやれ」

持っていた小さな灰皿で煙草の火を消し、グラムは苦笑する。

無精ひげの生えた顎を軽く撫で、イントレピッドと手を繋ぐ。

「行くよ」

イントレピッドがぎゅっと目をつむると、二人の姿が淡い光に包まれる。

それが晴れたとき、二人はすでにそこから消えていた。

後に残ったのは、煙草の残り香だけだった……

海に紫煙を燻らせて（後書き）

ラッキーストライクはアメリカで古くから売られている煙草で、元は緑色に赤丸というパッケージでした。

しかし戦時下では、アメリカと言えど緑インクに使うクロムが不足したため、パッケージは「白地に赤丸」に変更されました。

「ラッキーストライクの緑は戦争に行った」という口上で売れ行きを伸ばしますが、これはパッケージの視覚効果を高める意味もあったとされ、戦後から今にいたるまで緑色のパッケージは復活していません。

ちなみに日本兵も、アメリカ軍から分捕ったラッキーストライクを珍重していたそうです。

兵士は茶色い小瓶を求む（前書き）

どうも、風邪でダウンしていました。

兵士は茶色い小瓶を求む

電灯の消された、薄暗い部屋の中。

若い女がテーブルに突っ伏したまま、炭酸飲料を口にしていた。

背中まで届くブロンドの髪、海と同じ青い瞳、透き通るような白い肌。それに加え優雅な体つきをしており、男ならほとんどが魅了されるであろう美貌だが、そのだらしない佇まいが全てを台無しにしていた。コーラをがぶ飲みし、溜まった炭酸ガスを口から下品に吐き出す。

「Ha, ha, ha, you and me, Little brown jug, don't I love thee……」

虚ろな声で唄いながら、彼女は残りのコーラを一気に飲み干した。続いて一際大きく、炭酸ガスを吐き出す。

ふいに、空中に光が走る。彼女がそちらに顔を向けると、小柄な少女と無精ひげを生やした男がそこにいた。二人を、正確には男の方を見て、彼女は露骨に嫌そうな顔をし、口を開いた。

「あーによ、イントレピッド。気狂い雷撃屋なんか連れてきてどういふつもりよお？」

それを聞いて、グラハム・チェンバレン少尉はやれやれと苦笑した。彼からすれば予想していた反応だが、空き瓶を投げつけてこなかったただ今日は機嫌がいいらしい。

「『茶色の小瓶』ならぬコーラ瓶……アルコールなしでそれだけ酔

えるとは器用なもんだ」

「うるひゃいわねー！ わたしは元々船酔いしやすいから、酒なんか無くても酔えるんじゃないか！」

「お前船の化身じゃないのかよ」

静かに突っ込みを入れつつ、イントレピッドの方をちらりと見る。やっぱり来ない方がよかったんじゃないか、と目で尋ねるが、イントレピッドは無視した。

「エセックス姉さん、いくら太らないからって、甘いもの飲みすぎるのはよくないよ」

イントレピッドが語りかけると、彼女……空母『エセックス』の艦魂は鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

「いーのよ。仮に太っても、もう嘆く人いないし」

イントレピッドは聞こえない程度の溜息を吐いた。

艦魂が見える人間は極一部の限られた者たちで、空母のような巨大な艦でも、乗組員に見える人間が一人もいないことがある。しかし『エセックス』にはその「見える人間」が二人乗っており、艦魂たるエセックスと良好な関係を築いていた。

昨年、『エセックス』に日本海軍機が特攻するまでは。

「……あの二人が死んで、大好きだったグレン・ミラーも死んで……戦争なんて、いいことないじゃん？」

エセックスは空き瓶を投げ捨てる。幸い割れることなく、「ごろごろ」と床を転がった。

グレン・ミラー。アメリカを代表するジャズ・ミュージシャンであり、『ムーンライトセレナーデ』『真珠の首飾り』などの名曲を生み出した他、アメリカ民謡『茶色の小瓶』の編曲でも知られる。軍に入隊後、イギリスにて慰問演奏を行っていたが、1944年12月に彼を乗せた輸送機が行方を断ち、死亡と判断された。

乗組員の死後もカラ元氣を出していたエセックスだが、その知らせを聞いてから本当に全ての氣力を失ったのである。巨大な空母の艦魂とはいえ、精神は所詮十八程度の娘そのものだ。戦場ですさんでいく心を、音楽で支えていたのだろう。彼女の心の拠り所は、ほとんど失われてしまったのだ。

「グレン・ミラーは残念だったが、まだ幸せな方だろう。彼の曲はこれからも愛され続ける」

グラハムはポケットから煙草の箱を取り出すが、イントレピッドがその手を掴んで止める。エセックスが大の嫌煙家であると知っているからだ。グラハムは舌打ちして煙草をしまう。

「……普通、兵士は後に何も残せねえ」

「……何ですって？」

エセックスの青い目が、グラハムを睨みつけた。何を怒っているんだ、とでも言いたげに、グラハムは涼しい顔を続ける。

「あの二人も……グレッグとジャックも、何も残さなかったって言うの！？」

戦死した乗組員たちの名を口にし、エセックスはわなわなと震える。

それに対して、グラハムはフンと鼻を鳴らし、血も涙もない言葉

を放った。

「何が残っている？ 毎日毎日コーラ飲んでやさぐれてる、ロクデナシの妖精モドキが残っただけじゃねえか」

次の瞬間、エセックスが立ち上がった。椅子を蹴倒し、床を蹴り、グラハムに肉薄した。咄嗟にイントレピッドが間に入るが、エセックスは妹である彼女を容赦なく殴り飛ばす。

そしてグラハムの顔面めがけ、拳を打ち？？？出せなかった。

一瞬早く、グラハムのボディブローが、エセックスの腹部を捉えていたのだ。そのまま崩れ落ちるエセックスを、グラハムは見下ろした。

「俺たち雷撃機乗りはな、高度五メートルから十メートルの超低空で、対空砲火やクソ忌々しい零戦の迎撃をいくぐりながら敵艦に突入し、魚雷を投下する。俺が生き残って来れたのは、この反射神経と動体視力、そしてGにかかる中で機体をぶん回す腕力があるからだ」

イントレピッドを助け起こし、グラハムは煙草に火を付けた。紫煙を空中に吐き出し、うずくまるエセックスに再び目をやる。

「お前らは望んで軍艦に生まれたわけじゃねえ。運命が嫌になることだってあるだろうさ。だがな、お前が見える奴も、見えない奴も、みんなお前を守るため命を張ってるんだよ。せめて守り甲斐のある、いい女として振舞ったらどうだ」

うずくまっただまま、エセックスが微かに、声を出した。
泣いている。

ふいにイントレピッドが、グラハムの袖を掴み、ギョツと目を閉じた。光が一瞬だけ部屋に満ち、次の瞬間には二人の姿は消えていた。

エセックスは一人、ただ嗚咽するしかなかった。

……『イントレピッド』艦内に戻った後、イントレピッドはグラハムを軽く睨んだ。

言いすぎだ。

口に出すまでも無く、そう言いたいのだとグラハムにも分かる。

「分かってるさ、そのくらい。だがお前はこうも思ってるはずだ」

一旦言葉を区切り、煙草を吸って紫煙を吐きだす。

「自分が言いたかったことを、俺がまとめて言っちゃった、ってな」

図星だった。彼が言ったことは全て、今までイントレピッドが、姉に対して言っただけだと思っただけのことなのだ。

艦魂は普通の人間には見えないが、常に人間と共に歩む。もし『エセックス』の乗組員たちが、自分たちが命を預ける艦の艦魂に出会ったとき、どう思うだろうか。それを、姉に考えて欲しかったの

である。

「でも、あんな言い方……」

「俺はエイハブ船長だからな。荒くれの鯨捕りなんだよ」

不敵に笑みを浮かべ、煙草を吹かすグラハム。イントレピッドの手がまたもや煙草を狙うが、払いのけられる。ムスツとした顔をするイントレピッドの頭を、グラハムはやや乱暴に撫でた。

「さて、愛機の点検でもしてくるか」

ふらりと踵を返し、立ち去っていくグラハムの後ろ姿を、イントレピッドはじつと眺めていた。

空母『イントレピッド』も、日本軍の雷撃や特攻により、何人もの乗組員が死んでいる。空戦で散った艦載機乗り達を含めれば、かなりの人数になることだろう。

もしそれらのときに死んだのが、目の前にいるひねくれ者の雷撃屋だったら？ 自分はエセックスのようにならない保証が、何処にあるだろうか？ 何もかも投げ出し、自墮落の道に入らないと、自信を持って言えるか？

イントレピッドは、すでに大戦の真ただ中だった1943年に生まれた。就役したときには、「合衆国万歳！ 非文明国を征伐せよ！」という考えに、何の疑問も持っていなかった。

しかし、日本軍の神風特攻隊が『イントレピッド』に体当たりしたとき、彼女は見てしまったのだ。おそらく泣きながら、何かを叫んでいる、特攻機のパイロットの顔を。

日本兵もまた、何か大切な者のために命を賭ける、人間の若者だったのだ。イントレピッドはそれから毎晩、死んだ乗組員だけでな

く、特攻隊員の魂のためにも、祈りを捧げることにした。少しずつ、自分の中の『正義』の像が崩れ、何が正しいのか、何が悪なのかさえ、分からなくなってくる。姉妹たちにもまた、同様の悩みを抱える者が多い。

そしていつ来るかも分からない、心の拠り所を奪われる恐怖と、艦魂たちは日々戦っている。

「……本当は、誰のせいなの？　こんな戦争……」

……イントレピッドのその言葉は、人間たちには届かなかった。

その日の夜。

アメリカ海軍潜水艦『ハックルバック』は、豊後水道付近で日本海軍の巨大戦艦を確認し、名指しで本隊に連絡した。

その艦の名は、『ヤマト』。

兵士は茶色い小瓶を求む（後書き）

アメリカ民謡『茶色の小瓶』。

子供向けの歌詞は「お母さんがくれた、願い事の叶う茶色の小瓶」というような歌詞だったと思います（うる覚え）。

原曲では、茶色の小瓶と言うのは要は酒瓶のことで、片時も酒を手放せない、アルコール中毒の夫婦を唄った歌詞でした。

夢もへつたくれもないですね。

願い事の叶う魔法のアイテムなんて、所詮アル中の妄想だと言うことでしょうか（我ながらひでえ発想）。

グレン・ミラーが編曲したものは大ヒットし、今でも多くの人に愛されています。

さて、艦魂とはいえ、所詮は年頃の女の子が戦場にほっぽり出されているような状態ですので、戦場というものを真つすぐな目で見てしまいます。

大事な人を亡くし、自暴自棄になる者もいるでしょう。

何が正しいのか、思い悩む者もいるでしょう。

徐々に歪んでいく者もいるでしょう。

アメリカの艦魂だからと言って、ただ「キル・ジャップ！」と叫ばせるだけでは、キャラを作れているとは言えないと思い、できるだけ生々しい書き方をしたつもりです。

さて、次回でようやく主人公が『大和』に挑みます。
宜しければお付き合いください。

赤い太陽を射るために

…… 1945年 4月7日 ……

「無線装置、異常なし！」

「後部銃塔が上手く動かんぞ」

「急げ、今日はジャップの巨大戦艦が待ってるんだ！」

整備兵と搭乗員達が、格納庫内の艦載機を点検する。グラハムは愛機のTBF雷撃機を、じっと眺めていた。

『アヴェンジャー』の名を持つこの機体は、単発機としてはかなり大型で、パイロット達から「頑丈なトラックのよう」と言われていた。魚雷は爆弾倉内に完全に収納でき、攻撃機に不可欠な後部機銃は銃塔式で、全周囲に発射できる。初陣のミッドウェー海戦ではパイロットの経験不足もあり、大損害を被ったものの、F6F艦上戦闘機によって零戦の優位が覆ってからは、日本海軍の空母『瑞鶴』、大和型二番艦『武蔵』などを屠ってきた。

アヴェンジャー
「復讐者…… エイハブ船長にはお似合いだ」

ノーズアートを眺め、グラハムは呟いた。鋼鉄の鋸で貫かれた、白いマツコウクジラの絵。

物語の中で、エイハブ船長は片足を失った復讐心で白鯨を狙い、それはやがて、白鯨が悪そのものであると確信するほどの狂気となる。彼の暴走を諷める副船長スターバックの制止を振り切り、多種多様な人種で構成された乗組員たちを鼓舞しつつ、ついにビキニ環礁で白鯨を見つけ出すのだ。そして義足の身で自ら鋸を手し、白鯨に挑む。

しかしその結末は、愛機に描いたノーズアートとは違うことを、

当然グラハムは知っていた。

同乗者二人に煙草が吸ってくると言い、格納庫を出る。航空燃料のあるところで喫煙するわけにはいかない。

いつものように船縁へ行き、ラッキーストライクの箱を取り出す。口に咥えたところで、イントレピッドがひょっこりと現れた。

「煙草はやらねえぞ」

「ケチ」

ジッパーで煙草に火をつけるグラハムの横で、イントレピッドも海を眺める。この混沌とした時代でも、海は平和な頃と同じようにうねっていた。これから敵艦隊を討ちにいくにも関わらず、穏やかな気分になる。

「敵の巨大戦艦、『ヤマト』だっけ？」

「ああ。大昔に日本の中心だった地方の名前らしい。あるいは……日本そのものを意味する」

蘊蓄を垂れるグラハムの顔を、イントレピッドは見上げた。

「詳しいね？」

「……恋人から教わった」

恋人という単語に、イントレピッドは目を見開いた。

この武骨で荒々しく、敵艦に魚雷を命中させることだけに執念を燃やす男に、恋した女がいたなんて。何かよく分からない、絡んだ糸のような感情が湧きあがってくる。その感情の正体がイントレピッドには分ならず、それが激しくもどかしい。

「……へえ。グラハムの恋人が勤まるなんて、きつと聖母様みたいな優しい人なんだね？」

「ま、お前よりはな」

「うわっ、絶対そう言うと思った」

彼女の中で、不可解な感情が加速していく。それはいつの間にか苛つきにさえ変わり、グラハムに全部ぶつけてやりたいという衝動に駆られる。

「でもさあ、グラハムは軍人だから、いつ死ぬか分からないよね？結婚できないかもね？その人、可哀そうだね！」

「ああ、俺は死んだら地獄に行くかもしれないからな。天国にいる彼女には会えねえかも」

それを聞いた瞬間、イントレピッドの心臓が小さく跳ねた。心の中で絡んだ糸は、刃物で両断されたかの如くはじけ飛んだ。彼女には珍しくおどおどしながら、次に出す言葉を選ぶ。とにかく、謝らなければ。でも、なんと言おう。

悩んでいるうちに、グラハムの方が声をかけた。

「彼女の写真、見るか？」

「……うん」

グラハムの気遣いかは分からないが、イントレピッドはそれに甘えることにした。

グラハムがポケットから取り出した、一枚のモノクロ写真を受け取る。写っているのは豪快な笑顔を見せている、今より少し若いグラハムと、静かな微笑みを浮かべる女性。しかしその女性の顔は、少なくとも白人ではなかった。かと言って黒人やインディアンでもない。

東洋人だ。

「トヨコ、って言ってな。日系一世……純粹な日本人だ」

イントレピッドが驚きを隠せるはずもない。しかしアメリカと日本が友好関係を結んでいた時代が、確かにあったのだ。ハワイなどに日本人が多く移住していたことは、対日開戦後に生まれたイントレピッドでも知っている。だがグラハムという身近な人間が、日本人と関係を持っていたことは驚愕に値する。そんな彼女を尻目に、グラハムは続ける。

「開戦後、ユタ州の砂漠にある強制収容所に送られたんだ。敵性国民としてな。そこで持病が悪化して、死んだ」

淡々と語るグラハム。口から紫煙を吐きだし、遙か海の向こうを見つめる。

「トヨコはいつも、自分の故郷がどんなに素晴らしいか話してくれた。いつか二人で日本へ行こうって約束してたよ。だが日本は、彼女たちをあつさり見捨てやがった。誰よりも祖国を愛していた彼女を……」

「……やっぱりグラハムは、エイハブなの？」

イントレピッドの声が、僅かに高ぶった。

「憎しみなの？ 憎しみに戦っているの？ エイハブ船長みたいに、仲間を道連れに……」

ふいに、短くなった煙草が、イントレピッドの眼前に差し出された。イントレピッドは驚いて見つめていたが、やがてそれを手に取

り、小さな唇に咥え……激しくせき込んだ。

グラハムは笑いながら煙草を取り上げ、彼女の背をさすってやる。同時に、写真を返してもらう。

「な？ 子供は吸っちゃいけねえ」

写真を数秒見つめてポケットに納めると、グラハムはイントレピッドに背を向ける。彼女が何度も見てきた、パイロットの背中。不確実な生に縋りつく空へ、身を投じていく者の背中だ。

そのまま歩き去るグラハムに、イントレピッドは心の叫びを投げつけた。

「あんたが死んだら泣く奴が、ここにいるんだからね！」

……戦艦『大和』が沖縄へ向かったのは、菊水作戦と呼ばれる大規模な特攻作戦に呼応してのことだった。三連装の46cm砲を三基装備し、全長263mの最大・最強の戦艦でありながら、航空機の台頭と戦局の変化により、すでに活躍の場を奪われていた『大和』。日本海軍が『大和』に与えた最期の役目は、沖縄で特攻機迎撃に当たっているアメリカ軍戦闘機を、『大和』を沈める攻撃隊の護衛に振り向けさせること、すなわち「エサ」としての役目だった。護衛として軽巡洋艦『矢矧』以下、駆逐艦八隻が同行したが、航空支援は無きに等しい。

奇跡的に沖縄へ辿り着けたならば、沖縄島残波岬にて自力座礁し、陸上砲台として運用するという予定ではあったが、それには電気系

統が生きていること、座礁時に船体が水兵であることが必須であり、ほぼ不可能だったと言える。

『大和』の水上特攻作戦の真の意義は、「一億総特攻」という無謀な標語の先駆けとなることだったのだ。

アメリカ海軍のレイモンド・スプルーアンス大將は戦艦同士の決戦を望んだが、『大和』が日本海側へ逃げる恐れがあったことから、マーク・ミッチャー中將率いる第58機動部隊に攻撃を要請したと言われている。

第一次攻撃隊の発進は、4月7日午前10時頃だった。

「エイハブ船長、ドデカイ鯨を仕留めてやろうぜ！」

爆撃手のディックが軽口を叩く。

『イントレピッド』の飛行甲板で、すでにエンジンは唸り、油圧式カタパルトにセットされていた。連続射出可能なカタパルトをいち早く開発していたアメリカ海軍の空母は、日本海軍の空母に対して大きなアドバンテージを得ていたと言える。

「ああ、必ず魚雷を命中させる。そして……」

グラハムは『Moby-Dick』の結末を思い出していた。

狂気に囚われたエイハブ船長は、義足の身で自らボートに乗り込み、白鯨と対峙する。しかし白鯨は人間の手に負える存在ではなかった。エイハブ船長らのボートは一瞬で沈められ、母船『ピークオールド』も荒れ狂う白鯨によって海の藻屑と消えたのである。物語の語り部である、イシュメルという若者だけが生き残り、仲間たちの生き様を伝えることになるのだ。

爆撃手のディック、後部機銃手のライリーには、婚約者や家族がいる。グラハムと違い地上に、帰る家と迎えてくれる家族が存在するのだ。恋人を奪われたことが戦う理由なら、自分には同乗者を生きて家族の元へ帰れるようにしてやる義務がある……それが、復讐の中でグラハムが見つけた答えの一つだ。
そして……。

「……Contact!」

カタパルトにより、TBFの機体が急激に加速する。スロットルは全開、操縦を引き、機体は空中に放り出された。一瞬、シートに体が押さえつけられる感覚を覚える。機首を上げ、僚機と編隊を組む。

他の空母からも、次々に攻撃隊が発艦していた。一足先に飛び立ったSB2C急降下爆撃機は勿論のこと、戦闘機であるF6F『ヘルキャット』やF4U『コルセア』でさえ大半が爆装していた。『大和』という巨鯨を討つべく、アメリカ海軍もまた必死だったのだ。

「さあ、鯨狩りの始まりだ!」

赤い太陽を射るために（後書き）

卒論と同時進行中です。

この小説はあくまでも史実に沿ったフィクションであり、主人公は架空の人物だということを今更ながら表記しておきます。しかしもしかしたら、こういう男がいたかもしれないという妄想で書いています。

さて、あと一話＋エピローグで完結です。

鉄の鳥は銛を携えて

攻撃隊は曇天の中を、二時間近く飛び続けた。雷撃機の小隊を率いているグラハムは、僚機の様子に気を配りながら飛ぶ必要がある。すでに慣れたストレスではあるが、油断してはならない。

「そう言えばチェンバレン少尉は、今回のターゲットの同型艦を見たことがあるんですよね？」

後部機銃手のライリーが、若々しい声で言った。グラハムは「まあな」と応じる。

「レイテ沖海戦の時にな。爆弾倉開いたら魚雷が脱落しやがって、引き返そうとしたら零戦ジークに追いかかわされた。そのときお前の前任者が死んだ」

雄叫びをあげながら機銃弾をばら撒いていた部下が、突然何も言わなくなった瞬間を、グラハムは今でも覚えている。自分も負傷し、血まみれになって帰投したこと、何よりも雷撃に失敗した悔しさが忘れられない。

「帰還したとき、お前は代わりの魚雷を寄こせって叫びやがった。エイハブ伝説の始まりよ」

爆撃手のディックが、軽く笑った。彼はそのとき負傷したが、辛うじて重傷は免れ、今もグラハムと組んでいる。国の正義を語らず、昇進にも興味を示さず、頑迷な職人のごとく雷撃に執念を燃やすグラハムに心酔していると言っている。小隊の仲間たちも、そんな彼の姿に魅かれる者が多かった。そしておそらく、イントレピッドも。

「今度こそ、白鯨に魚雷を叩き込んでやろうや」
「ああ、必ずな」

戦いを生き抜いていくうちに、グラハムは戦う目的の変化を感じていた。彼の恋人を死なせ、裏切った日本への復讐。だがそれは敵の軍艦をいくら沈めようと、どうなるものでもない。本当に復讐を果たすなら、自分自身の手で日本の政治家を殺さなければならない。兵士の分を超えたことだし、仮に達成できたとしても、その時点で生きる意味が失われてしまう。

復讐などしても、あの優しかった彼女が喜ぶはずがない。グラハムは最初から分かっていた。それでも、戦わずにはいられなかった。じつとしていることなど、彼の性に会わないことだった。簡単に言うてしまえば、憂さ晴らしだったのかも知れない。しかし仲間を率いるようになると、それが変化してきたのだ。

低高度で突入し、敵戦闘機の迎撃をかわし、対空砲火を掻い潜り、魚雷を投下する。そして、攻撃の成否を見届けて帰投。グラハムは仲間たちに指示を出し、一人でも多く生き残らせなければならぬ。その責任の重さが、そのスリルが、グラハムの魂を奮わせた。命をすり減らす過酷な戦いに、自分の居場所を求めたのである。祖国、敵国、思想、倫理、怨恨……全ての煩わしい物から解放され、ただ生と死のみが存在する場所に。彼は軍人ではなく、まさしく雷撃屋なのだ。

だが雷撃機は、近いうちに姿を消すだろう。

来襲した日本軍の雷撃機や特攻機が、VT信管を搭載した対空砲弾の前にあえなく散華していく光景を見て、グラハムはそう悟った。砲弾自らが電波を出して飛び、敵機とすれ違った際に周波数の差異

を感知して炸裂、敵機を破片の雨で引き裂く。アメリカ軍は原子爆弾の開発と同等の費用をつぎ込み、この対空兵器を生みだした。パイロットの技術だけで打ち破れる兵器ではない。

対空兵器の発達によって、雷撃はどんどんリスクが高まっていくなに違いない。やがて、もっと有効な対艦攻撃の手段が生まれるはずだと、グラハムは予測していた。実際1943年にはすでに、ドイツが対艦ミサイルの原型を実戦投入している。TBF『アヴェンジャー』が、艦船への雷撃を行った最後の航空機となるかもしれない。航空機によって戦艦が時代遅れとなったように、雷撃機もまた、別の兵器にとってかわられる運命なのだ。

上等だ、とグラハムは思った。自らの手で、雷撃屋の終焉に一花咲かせてみせよう。所詮それも負の遺産として語り継がれるかもしれない。それでも特大の白鯨を仕留め、自分の爪跡を戦場に遺したい。同時に、憎しみに終止符を打とう。国へ帰ったら、恋人の墓に花を手向けよう。

日本そのものの名を冠した、『ヤマト』という巨艦こそ、狙うべき巨鯨にふさわしい！

「見えたぞ！ 敵艦隊だ！」

遙か前方に、小さな点が数個浮かんでいた。事前の情報からして、日本海軍に違いない。

「僚機へ通達！ 突撃す、我に続け！」

グラハムは機首を下げた。機体は徐々に高度を下げ、海面を掠めるような低空で水平に戻す。

この高度からだ、と、敵艦も自分も同じ目線だ。ディックに爆弾倉を開かせ、接敵する。旗艦を中心とし、円形に艦隊が形成されてい

た。護衛駆逐艦からの対空砲火が始まる。時限式信管の砲弾が炸裂し、破片と衝撃波を撒き散らした。第一波攻撃隊の急降下爆撃機が対空砲をかなり破壊したはずだが、それでも生き残った銃砲が必死に撃ってくる。

「怯むな、日本軍にはVT信管が無い！」

旗艦の姿がはつきりしてきた。グラハムには見覚えのある、城郭のような巨大戦艦。雄々しい艦砲に、堂々とした艦橋。レイテ沖海戦で同型艦を見たとき、その美しさに目を奪われた。これこそ日本の象徴……いや、グラハムにとっては日本そのものだった。

ふと、イントレピッドのことを思い出す。彼女たち艦魂が幻影でないのなら、おそらくあの巨艦にも艦魂が宿っているのだろう。それがイントレピッドのようなクソガキか、エセックスのように自堕落になった女か、あるいは亡くした恋人のように優しい女なのかは分からない。だが、いずれにしろ迷いは無い。

「……このまま終われないんだろ？　一花咲かせたいんだろ？」

対空砲弾が炸裂する中を、グラハムは飛ぶ。魚雷は水平に投下しなければ真つすぐ進まないし、この低空では急旋回も難しい。迎撃や敵艦の回避行動には、垂直尾翼の方向舵ラダーを使った横滑りで対応するしかない。

ラダーペダルに添えた足に、グラハムは神経を注ぎこみつっ、巨鯨に語りかけた。

「俺も同じさ……見た目は若くても、お互い時代遅れのロートルつてわけだ」

砲弾の破片が、機体に当たる。だが敵の艦にも、火を吹いて沈み

かけている艦があつた。グラハムが狙うは、巨鯨『大和』のみ。

戦艦のシルエットがどんどん大きくなる。もう少しだ。敵艦の予測進路に照準を合わせ、魚雷との相対速度を計算。

「用意……投下ッ！」

開いた爆弾倉から、魚雷が投下された。投下後、即座にラダーを切つて離脱する。下手に高度を上げては、対空砲火の餌食だ。

爆弾倉の蓋を閉じ、僚機を引きつれて加速。グラハムは『大和』の艦砲射撃が、乗組員たちの絶叫に聞こえた。近くで炸裂した砲弾の破片が機体にぶつかり、爆発の衝撃波でキャノピーに頭を打つ。自分の命が徐々に、すり減っていくのを感じる。煽られた機体を必死で立て直し、弾幕を突破する。

刹那、『大和』の方から爆発音が聞こえた。

「命中！ 俺たちの魚雷です！」

ライリーが叫んだ。

振りかえると、『大和』の左舷側で、巨大な水柱が崩れていくのが見えた。エイハブ船長の銚は、白鯨に届いたのである。無論、一発や二発で沈む艦ではないが。

グラハムは操縦桿を握りながら、抵抗を続ける『大和』を顧見た。雄大な艦影が煙を吹きつつ、徐々に遠ざかっていく。あそこで、艦魂は何を思い、何を語っているのだろうか。神ならざる身のグラハムに、知るすべもない。

「……帰投するぞ」

総勢四百機近いアメリカ軍機が、『大和』に波状攻撃をかけた。午後十四時二十三分、『大和』を転覆し、爆発。艦体が真つ二つに割れ、海の藻屑と消えた。護衛に当たった艦で生き残ったのは『雪風』『初霜』『冬月』、そして艦首に直撃弾を受けながらも佐世保に辿り着いた『涼月』だけだった。

これに対して、米軍機の損害は十機だったという。

夜の潮風が、グラハムの頬を撫でた。いつものように船縁で、今夜はジョッキに一杯のビールを片手に、波の音に耳を傾ける。あの後再度出撃し、『大和』の最期を見届けたのに、奇妙なほど彼の心は穏やかだった。すでに沈んだ艦の乗組員が重油だらけの海に浮いており、他の仲間たちはその頭上に機銃掃射の雨を降らせていた。日米問わず、よくある光景である。俺たちもやらなくていいんですか、とほざいたライリーに、デッキが怒鳴りつけた。お前は鯨捕りのエイハブ船長に、クラゲを捕れっていうのか……と。あいつら

しい言葉だと、グラハムは思った。ディックの言つとおり、グラハムはただ浮いているだけの人間に興味はない。彼の狙いはただ、巨鯨だったのだ。

ふいに小さな手が、ビールのジョッキを掴もうとした。グラハムは溢さないよう注意しつつ、素早く身をかわす。

「煙草の次は酒か。このクソガキ」

「むう、一口だけ!」

「コーラで酔っぱらう女の妹に、酒なんか飲ませられるか。さつさと寝ろ、クソガキ」

二言目にはクソガキ呼ばわりするグラハム。いつも通りの彼であることに、イントレピッドは少し安心した。

「……奴らの戦争は終わった」

視線を海に戻し、グラハムは呟く。奴ら、というのが何を指した言葉か、イントレピッドが理解するまで数秒を要した。

「だが、俺は生きてる。生きてる以上、次の戦に行かなきゃならねえ。戦わなきゃならねえ。だが今はまだ、それで満足だ」

グラハムはジョッキを海に突き出し、ゆっくりと傾けた。黄金色のビールが、帯のように闇に吸いこまれていく。やがて、ジョッキには白い泡だけが残った。

「あばよ……俺の白鯨……」

モビーディック

夜空の下だったが、イントレピッドは確かに見た。

彼の目から、一滴の滴がこぼれおちるのを……。

エピソード

……戦争が終わった後、グラハムは除隊した。あのまま在籍してれば、出世できたかもしれないけど、もう駒には飽きてたのかも。

日本へ行くって言ってたけど、結局何処で何やってるのか分らない。どこかで野垂れ死にしたかもしれないし、今でもピンピンしてるかもしれないし。

私は煙草吸わないけど、いつもラッキーストライクを持ち歩いてるんだ。あいつがまた、「ようクソガキ」とか言いながら現れるよな気がしてさ。

……エセックス級空母の中で、今でも生き残って博物館になったのは、四隻。みんな離れ離れ。

あ、寂しくはないよ。最近ケータイ始めたんだ、ふふん。毎日連絡取り合ってるんだ。

あの戦争が何だったのか、私にはもう分からない。その後の朝鮮戦争もベトナム戦争も、いよいよ何が正しいか分からなくなってきた。でもね、見た物を話すことはできる。戦いを生き残った語り部イシユメルとして、あいつらの生き様を伝えてあげたい。

そう、思ったんだ。

付き合ってくれて、ありがとう。
またね。

エピローグ（後書き）

ようやく完結させることができました。

お読みいただき、ありがとうございます。

戦後、負けた日本が平和な国になったのに対し、勝ったはずのアメリカは小規模なれど更に悲惨な戦争へ足を踏み入れていきます。同盟国だったソ連とも冷たい戦争がはじまり、核開発競争が勃発します。

アメリカに限らず、冷戦初期は何でもかんでも核・原子力でした。原子力飛行機、核地雷、核魚雷、核スーツケース……もう訳分かんねえ。

まあ「核さえあれば何でもできる！」って考えは、今の日本の右翼も大して変わらない気がします。

このような時代の激動を生き抜いたイントレピッドと、どこかへ消えていったグラハムの物語。

ご感想・ご批評をいただければ幸いです。
では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6497q/>

艦魂異聞録 ～エイハブよ、大和を討て！～

2011年10月3日17時53分発行